

漢語の読み方はどのように決められてきたか

戦前の放送用語委員会における議論の輪郭

塩田雄大

要 約

漢字で書かれたことばをどのように「読むか」ということをめぐって、放送が始まった当初のころに、さまざまな試行錯誤がなされた。

放送において漢語・漢字語¹⁾の読みがどのように定められてきたのか、ということを考えるのにあたって、ごく初期にあたる1934・1935(昭和9・10)年の状況を概観する。具体的には、漢語・漢字語の読みに関してどのようなことが当時問題になっていたのかということを経典類の記述から瞥見したあと、いくつかの漢語・漢字語の読みに関する放送用語委員会での提案・決定を議事録類から紹介し、まとまった公的資料である『常用漢語発音整理表』²⁾(1935(昭和10)年)発行までの流れをめぐって考察する。

当時の用語委員会の決定に関して、以下のような諸特徴を認める。

漢語一語一語の「読み」の決定に関して、

- ① 相当広範かつ詳細な資料を準備し、慎重に審議していたこと
- ② どちらかという漢語の伝統的な「読み」よりも、全体としての規則性(記憶上の負担の軽減)を大きく視野に入れた新しい「読み」を採用しようとしていたこと
- ③ その決定は、当時の規範的な漢和辞典の記述とは異なるものも少なからずあり、現在にまで同様に継承されているものが多い

これは、書きことばの伝統にこだわらず、新しく「耳のコトバ」を創成しようという放送用語委員会の姿勢の表れであると感じさせるものである。

目 次

I はじめに	80	IV 『常用漢語発音整理表』の読み	94
II 放送開始初期の音声言語と規範意識	80	V 暫定的な本稿のまとめ	100
III 『常用漢語発音整理表』の成立まで	86		

I

はじめに

漢字で書かれたことばをどう発音するかという問題は、放送開始の初期から現在に至るまで、非常に大きな問題として取り上げられてきている。本稿では、「漢語・漢字語」というものを、どのような資料を用いて、どのような議論をし、結果的にどのような結論に至ったのか、という諸点について、当時の記録・資料を中心に概観し、共通語形成史（＝話しことばとしての日本語共通語がどのように形作られてきたか）における放送の役割について考察することを目的とする³⁾。

日本語共通語の成立に関しては、書きことばを中心とした明治・大正期日本語の研究がこれまで質的・量的両側面において重要な蓄積がなされているのに対して、音声面に焦点を当てた大正末期・昭和初期日本語の研究が、やや未開拓である。共通語の成立に放送が関与したということはこれまでも数限りなく指摘されているものの、その指摘を裏打ちするような放送初期の具体的な言語事実に関する記述・分析には、まだ補うべき内容があるものと考えている。

II

放送開始初期の音声言語と規範意識

放送のことばが耳障りである、といったような否定的な指摘は、1925（大正14）年の新聞にすでに掲載されている（塩田雄大（1999））。これは、放送の開始によって他地域のことばを耳にする機会が増えたことに対する当時の

人たちの（規範的）言語意識を表している資料としてとらえることができるだろう。それと同時に、当時の日本語の実態を示しているものと言える。

ここでは、昭和初期のころの放送における日本語についての「反響」をはじめとする記述のいくつかを取り上げることによって、当時の実態的な放送用語の一端を探ってみたい。分量があるので、ここでは、漢語・漢字語に関する指摘のみを紹介する（表1）⁴⁾。

ここで掲げた記事・論文について説明を加えておくと、①は、1931（昭和6）年9月2日から12日にかけて教育放送で放送された内容について、「東京市富士小学校」で批判的に検討されたものである。

②は、アナウンサーの読み誤りとして増田幸一氏（広島高校教授）がある雑誌⁵⁾に掲載したものである。この内容は、米良忠麿（1932.8）「絃上の音」『調査時報』第2巻第15号において引用されている。ここでは、この引用部のうち漢語・漢字語の読みに関連するものを再引用した。表中でのカナ書き発音は、実際に放送されたことばのうち増田氏が誤用と考えたものである。

③は、現在の放送用語委員会の前身である「放送用語並発音改善調査委員会」（以下「放送用語委員会」と略称）の発足（1934（昭和9）年）にあたって記されたものである。執筆者の岡倉由三郎は、調査委員主査である。

④表2は、1934年に全国各放送局に宛てられた投書7,225通のうち、放送のことばに関するもの691通の概要を雑誌誌上で紹介したものである。ここでは、漢語・漢字語の読みに関する指摘について、塩田が暫定的に分類を施して掲載した。

表1 漢語・漢字語の読み方に関する指摘 ～昭和初期の雑誌に見る～ (地名・人名・固有名は除く)

報告年月	記述	執筆者	記事・論文名	掲載誌
① 1931.10	「学校に入るを入ると読んだ」「大君(オホギミ)をオホキミと読む」「目に入つたのは…入つたのはと読みたなり」	東京市富士小学校 増田幸一	「教育放送の批判記録」 (不明)	『調査時報』 第1巻 第12号 (不明)
② (1932.8.8以前)	荷役(ニエキ) 定例会議(テイレイ) 救済(キウジヤイ) 石工(イシコウ) 擡頭(ダイトウ) 誤謬(ゴビョウ) 核心(ガイシン) 発端(ハツタン) 未曾有(ミソユウ) 内幕(ナイマク) 相殺(ソウサツ) 容態(ヨウタイ) 圓滑(エンコツ) 出納(シユウノウ)			
③ 1934.2	「われわれのうちにお茶を飲ませる家のことを「キツチャテン」という人も、「キツサテン」といふ人もある。それ等をどちらにしたものか、「ギケンキン」と「ギエンキン」の問題もただ字引にケンの音がないといふだけで片付けるか、またはたとへ字引の上では間違ひであつても言ひならばでは正しいといふ変態な扱ひをしなければならぬ場合も屢々出てくるであらう。(中略)チャ、サ、どちらの音も使はれてゐる類の漢字を例にとつてみると、発明、発心の発、明瞭、明日の明などを挙げるができる。」 (表2)	岡倉由三郎	「放送用語並発音改善調査事務の開始とその仕事」	『調査時報』 第4巻 第3号
④ 1935.5		総務局計画部	「放送の言葉に関する事項投書調査」	「放送」 第5巻 第5号
⑤ 1936.11	(表3)	総務局計画部	「投書内容調査」「放送の言葉」に関する事項	「放送」 第6巻 第11号
⑥ 1938.7	(表4)	河合綱吉	「四声とラヂオ」	「国語と四声」 第3巻 第1号
⑦ 1939.1	(表4)	三宅武郎	「放送国語批評」	「国語運動」 第3巻 第1号
⑧ 1939.1	「アナウンサーが「シュザンショウレイ」と度々繰返したが、珠算(たまざん)のことであった。「たまざん」で昔も今も誰れにもわかるのに、なぜ「シュザン」とゆうのか、改めさせたい。」	Ikeda-T.氏	「ラヂオ投書箱」	「国語運動」 第3巻 第1号
⑨ 1939.1	「昭和十三年二月夜AK午後四時ニュースから。一喜一憂をイチキイチウといわれたが、一天万乗、一得一失、一死報告、一朝一夕、挙国一致、一中節、一知半解、一半一斑、なども「イチ」と統一されたのでしょうか。動静 ドウセイ 右はドウジヤウを正しいかと思いますが、白衣 ハクイの式に御研究になったものと存じます。これでいいと思います。」	服部嘉香	「ラヂオ投書箱」	「国語運動」 第3巻 第1号
⑩ 1939.3	「精進は セイジン フタイテン、精神不退転、シャウジンレウリ 精進料理、右の区別を正しくして頂きたいと思ひます。」	服部嘉香	「ラジオ投書箱」	「国語運動」 第3巻 第3号
⑪ 1942.10	「放送用語を使つて放送をするアナウンサーは、どんな問題に直面してゐるかを、層越ではあるが自分の経験を中心として述べていくことにする。(中略)標準語と私の語彙とが、語形が違つてゐた例をあげてみよう。(中略)フクジンスケ(福神漬)ー私は「フクジンスケ」であつた。 キシモジン(鬼子母神)ー私は「キシボジン」(中略) フルホン(古本)ー「フルボン」と云ふ人もあるが、従来の云ひ方は「フルホン」である。放送用語としては「フルホン」と決定してゐる。私は「フルボン」と云つてゐた。」	市川重一	「アナウンサーと国語」	「現代日本語の研究」
⑫ 1942.12	振作[シンサク]ー[シンサ] 清郷工作[セーゴ]ー[コーサク]ー[セーキョー]ー[コーサク] 忽然[コツゼン]ー[コツネン] 楔入[セツニュー]ー[ケイニュー] 摺伏[ショーフク]ー[シューフク] 攪乱[コーラン]ー[カクラン] 免除[サンジョ]ー[センジョ]	佐藤孝	「現代語と放送用語」	「国語文化」 第二巻 第十三号

表2 「放送の言葉に関する事項投書調査」(1935.5) [漢語・漢字語に関するもののみ抜粋,地名・人名・固有名は除く]

宛局名 (数字は 投書数)	内容	備考(○は用語委員会事務局として同感・肯定するもの、●は調査中、無記入は放送用語以外の要因を含むもの)
東京	大広間ー大ヒロマが正。	○
東京	養蠶ー「ヨウサン」が正しい。	○
東京	養蜂ー「ヨウホウ」が正しい。	○
東京	菜根譚ー菜根タンが正。	○
東京3	伊藤痴遊氏軍人勅諭中、維持をキチ、和譜をワカイ。	投書の読方は陸軍省教育総監部に於て定めたる読方と同一なり
東京	三十町歩を三十町歩と読む、注意。	○
東京	首相ーセウナリや、ソウナリや。	「シヨウ」をとる
東京	職業紹介ーシヨクゴウ紹介、注意。	○
東京	蒐集ーキンシュと読む、注意。	○
東京	懸壺ーコンモウが正。	○
東京	仲買人を仲ガイジンと言つた、注意。	○
東京	通言ーユキゴンが正。	○
東京2	端緒、寧猛、残滓、北陸道が正しい。	○
東京	誤謬ー誤謬が正。	○
東京	絶叫ー絶キョウが正。	●
東京	早急ー早急が正。	●
東京	掉尾ーチヨウビが正。	●
東京	遂行ースイギョウが正。	●
東京	治安ーチヤンが正。	○

東京	治療—チ療が正。	○
東京	自治—自チが正。	○
東京	婉曲—エン曲が正。	○
東京	直載—直セツが正。	○
東京	発去—コウ去が正。	●
東京	戒飭—戒チヨクが正。	●
東京	猜疑—サイ疑が正。	○
東京	弛緩—シ緩が正。	●
東京	容體—ヨウタイが正。	○
東京	発起—ホツ起が正。(発句,発端,十一月十九日七時)	○
東京2	工作—コウサツ 統一希望。	○
東京	機背—「タウコツ」が正。	●
東京	入洛—「ジュラク」が正。	○
東京	退—タイが「あらずや」。	○
東京	宣化—センカにあらずや。	○
東京	防遏—「ボウアツ」が正。	○
東京	忙殺—「ボウサツ」が正しい。	○
東京1	国政變理—セウリが正。	○
大阪1		○
京都	ニュース中,晋山式—シンザンシキが正。(晉)	○
熊本	温州蜜柑—ウンシユウが正。	○

音読みと訓読みの異同に関するもの

東京3	伊藤痴遊氏軍人勅諭中,御制—ギヨセイ,七百年をシチヒヤクネン,稜威をリヨウキ,福をフク,訓諭をクンユ,其の間をソノカン。	○
東京	月の出をフタ十一分はニジユ—と希望。経済市況はフタ十一銭の方が好い。(七時—ナナジ)	●
熊本	護国の鬼—ウヰと発音希望。	●
福岡	県下に於ける戸口調査云々—ココウが正。	○
東京	海鳴—カイメイ,又はウミナリと呼ぶ,ウミナリに統一希望。	○
熊本	天気予報中,夕々—ツタツが正。(寧ろ今晚がよい)	○
大阪	東西二元放送囲碁中,九と十,七と一は混同して不明。七,一,十,九—と希望。	○
大阪	西瓜—スイカ—「一タマ」が正。	○
東京	帆船—ハン船が正。(子供の新聞)	○
新潟	商工会議所物価調査報告中,着尺—モスリン—着尺—モスリンが正。	○
熊本	産業ニュース中,作柄—サクガラが正。	○
熊本	早生ホ—ワセアカが正。	○

音韻上の問題

東京	氷点—「ヒョウテン」が正。	○
東京	ヒトン,代表—代シヤウ,被害—市街—死骸—批評—死傷,非賊—士族,注意。	○
東京	趣味—シユ味が正。	○
東京	評議—ヒョウギが正。	○
東京	十階—ジュウガイが正。	●
小倉	時報中,八分—ハチファンが正。	○

用法上の問題

東京3	伊藤痴遊氏軍人勅諭中,陸海軍をカイリクゲン,只、一途—をタイチズニ。	○
-----	------------------------------------	---

その他

東京8	未だ「ニツポン」と「ニホン」の区別がしてあない。	
大阪10		
名古屋1		
岡山2		
小倉1		
福岡1		
東京	木立—コ立が正。	木立(コダチ)
東京	芥子,辛子をケンと云つた,カラシならずや。	○
東京4	燕麦—カラスムギが正。	○
東京2	大手合—「大テアワセ」が正しい。	「オーテアワセ」に審議済み
金沢1		
仙台1		
東京	各々の立場—「タチノ」が正。	○
東京	博士—「ハクシ」にあらずや。	学位名としては「ハクシ」をとる

表3 「投書内容調査「放送の言葉」に関する事項」(1936.11)【漢語・漢字語に関するもののみ抜粋,地名・人名・固有名は除く】

語の複合による清濁に関するもの

宛局名 (数字は 投書数)	内容	備考(○は用語委員会事務局 として同感・肯定するもの)
東京	「何々検事係」を「ガカリ」といふは誤。	○
東京	戦死者遺骨帰還の場合,何某少尉等「十三柱」は「十三ハシラ」が正。	○但「柱」は祭祀用語。
東京	交渉方,促進方,選定方等何れも「一方」にあらず。	○
東京	三味線「替手」を「カエテ」といふ。不可。	○
東京2	「齋」は「トギ」,「横着者」は「オーチャクモノ」なり。	放送用語としては「トキ」 「オーチャクモノ」を採る。
東京	「日満両国」は「リョーコク」の方,可。	
広島	「営業所」「散宿所」「出張所」は「所」の方よきはなきや。	「所」の「シヨ」「ジヨ」は画一的に 取扱ふこと能はず,慣用に従ふ。
大阪	「建国」をいつも「ケンゴク」と濁る。「ケンコク」の方よろし。	○
大阪	「四階建」は「ヨシカイダテ」の方よろし。	○
大阪	「開山」「門跡」正し。「カイザン」「モンセキ」誤り。	○

音読みにおける異同に関するもの⁶⁾

東京	敷宿(フヘン)は…ふえん 漸次(ザンジ)は…ぜんじ 森殿(シンゴン)は…しんげん 【塩田注 後者が「正」】	○但,場合により「森ゴン」「森ゲン」共に可。
東京	切手「貼付」を「テンパ」といふは誤。	○
東京	「発足」を「発足」,「発起」を「ハツキ」といふ誤ならずや。	誤にはあらず但放送用語としては「ホツソク」「ホツキ」を採る。
東京	「カナダ内閣連袂辞職」を「レンケツ」といふのは誤り。	○
松江	「回溜」「溜走」の「溜」は「カツ」が正。	○
東京	「擾乱」を「カクラン」,「紊乱」を「ビンラン」といふ,百姓識なり。	現在放送用語としては慣用音 「カクラン」「ビンラン」を採る。
東京	「警保局」は「ケイホーキョク」なり。	「ケイホ局」正,警保局照会済。
大阪	「天保山」「警保局」の如き「保」を「ホ」とするくせあり。	「天保山」は「天ボー」,「警保局」は「警ホ」なり。
大阪	「首相・文相・海相」は「ソー」なり。「シヨ」にあらず。	放送用語としては「シヨ」とす。
東京	「植字工」印刷屋仲間では「チヨクジコ」なり。	放送用語としてはその社会の慣用に従い「チヨクジ」を採る。
東京	「大佐」陸軍にては「タイサ」海軍にては「ダイサ」なり。	陸海軍共「タイ佐」とす,両省照会済
大阪	「禮拜」は「ライハイ」なり	場合により「レーハイ」「ライハイ」 いづれも用ひられる。
東京	「加重」(カジュー)は「カチョー」,「固執」(コシツ)は「コシユー」,「郷土芸術」(キョウト)は「ゴード」と学べり。	「カジユー」「コシツ」「キョード」にて可なり。
大阪	「大阪控訴院」「出生」「比較」は誤。	○
広島	「収斂」を「シユウケン」,「カフェイン」を「コカイン」といふ。共に誤。	○
名古屋	「曙光」を「シヨククワウ」と何度も讀んだ。	○
熊本	「後築」を「シユンチョー」といふ。誤。	○
大阪	「遂行」を「ツイコー」,「帷帳」を「チョーアク」といふ人あり。誤。	○
東京	「遂行」を「ツイコー」といふは誤り。	○
大阪	「冀察」を「キョクサツ」,「ヨクトー」といふ。誤。	○
大阪	澄宮様の熊野川「廻行」を「サクコー」といふは誤。	○
東京	「御協力」を「ゴコーリョク」といふは誤。	○
東京	(雑音)を…ゾーオン (蘭備)を…ランカ (言質)を…ゲンシツ 【塩田注 後者が「誤」】	○但し「言質」は慣用音として 「ゲンシツ」を採る。
東京	「荷役」を「ニエキ」といふ不可	○
東京	「工作」を「コーサ」といふが「コーサク」の方がよい。	放送用語としては「コーサク」と決定
東京2	「殫殫」を「ナイモウ」,「不俱戴天」を「サイテン」といふは誤。	○
東京2	「嗅覚」を「シユウカク」といふ。誤。	○
東京2	「良寛様は恬淡無慾」を「カツタン無慾」といふは誤。	○
東京2	「祭祀」を「サイキ」,「左右馬寮」を「サユウマリヨオ」といふは誤。	○
東京2	「慰藉料」を「イセキリョー」といふ。不可。	○
東京	「統治」は「トーヂ」。	○「統治」の「治」は「チ」を採る。
新潟	「官庁公示事項」「ジ」と濁音を望む。	放送用語は「コージ」と決定。
東京	「曹洞宗」「黄蘗宗」にして「ソード」「コーノバク」は誤。	○
大阪	「精靈棚」にして「シヨレイダナ」は誤。	○
秋田	「正信念仏」は「セイシン」ならず。	○
東京	「聖典講義」の「セイ典」は仏教にては「シヨ典」を正しとす。	○ この場合は「セーテン」の方を可とす。

東京	国神会(コトヘエ)を「クワイ」と誤る。加行(ケギョウ)を「カギョウ」と誤る。	○
新潟	曹洞宗聖典「修證義」を「シユウシヤウギ」といふ。聞きぐるし。	○

音読みと訓読みの異同に関するもの

大阪	「今日」は「キヨー」より「コンニチ」がよい。	
大阪	「今夕」 「コンニュー」でなく「コンセギ」の方がよろからずや。	「ユウ刊」の例もあり。
名古屋		
東京	内訳(ナイヤク)は…うちわけ【塩田注 後者が「正」】	○
小倉	経済市況「明太子」を「メンタイシ」、「生鰯」を「イクブリ」といへり。誤。	○
東京	産業ニュースにて「白木耳」を「ハクモクジ」と音読しては通ぜず。	○中央産業組合照会済。
東京	薬名「麻黄」を「アサギ」と誤る。	○
長崎	番組発表の時「阿部川の義父」を「ヨシオ」と誤る。	○
大阪	「アヲウニ番」を「サンパン」といふは誤り。	○
東京	(半暗半曇)を…ハンハレハングモリ(将に将たる)を…マサニシヨータル(外侮)を…ソアナドリ(軽々に)…カガルニ【塩田注 後者が「誤」】	○
東京2	「汽船感嘆網」を「キセンテイヒキツナ」と誤る。	○
東京2	「灰燼」を「ハイジン」といふ、誤。	○
東京2	「海鳴」を「カイメイ」、「低気圧東北位」を「トーホクグライ」は誤。	○
大阪	「二河白道」をはじめ「フタカワハクドー」次に「ニガハクドー」といつた。誤り。	○
東京	「二」の読み方について、「フタ千、フタ百」の外は凡て「ニ」とすることによって一定されたし。 (例) 二十二億フタ千フタ百二十二萬フタ千フタ百二十二圓二十二銭。	
大阪	温度「二度」を「フタド」といふは重苦し、実際はなれがしてゐる。	
小倉	「十貫当り」の「トウカン」は「ジツカン」が通りよし。	
東京	「明日の歴史」の「明日」のよみ方、「ミョーニチ」か「アス」か一定されたし。	「ミョーニチ」を採る。

音韻上の問題

東京	時刻「三十八分、二十八分」等の呼び方は「八分」の方、聞きよし。	以下数詞の発音については調査中。
東京	「十」のよみ方、「ジユツ」とせず「ジツ」とされたし。なほ「十手」は「ジツテ」なり。	○
東京4	「ヒ」「シ」の混同を避けられたい。被害(死骸)、代表(代償) 匪賊(土族)、否定(指定)等同音語も紛はし。	○
大阪	「氷点下」等「江戸ッ子」を真似られては困る。	○
東京2	全国主要都市「シユ」と発音されたし。 制定(「セイテイ」が正)、快晴(「ーセイ」が正)	○ 字音「エイ」を「エー」と発音すること一般に認容せらる。放送用語としても両用を認む。 「クワ」「カ」は現代の発音にて混同を免かれず。放送用語としても両用を認む。
東京2	「快晴」が「改正」に聞こえる。	

用法上の問題

広島	「時刻」といふべきを「時間」といふ。改めよ。	
札幌	「甘藷」は必ず「サツマイモ」と言ひ「甘蔗」と区別せよ。	○更に「甘蔗」を「サトーキビ」とせば一層明瞭。

その他

東京	「博士」の「ハクシ」「ハカセ」不統一。	学位令の「〇〇博士」は「ハクシ」と一定。
札幌	「〇〇博士」は「ハカセ」とはせずに「ハクシ」と乞ふ。	
東京	学位令では「ハカセ」なり。「ハカセ」の方が一般に耳にもよく又正し。	
札幌	「…博士」は古来「ハカセ」なり。	
松江	「博士」は「ハカセ」なるべし。	
東京	に係る(かかはる)は…かかる 難い(がたない)は…がたい【塩田注 後者が「正」】	○
東京	「鉛糖」を「エンスカ」と誤る。	○
広島	「講座」「衆議院」「実現」「労働組合」「中々キカス」「ローマ駐在」「増減」「出来ス」「予算千萬」「何々されず」	○
東京5	「水曜日」「小学校のお時間」以上誤なり。	
大阪	「日本」は「ニツポン」にして「ニホン」にあらず。	「ニホン」も誤りにはあらず。
熊本		
札幌		

⑤表 3 は、1935 (昭和10) 年に各局に宛てられた投書 7,913 通のうち、放送のことばに関するもの 748 通の概要を雑誌誌上で紹介したものである。④と同様に分類をした。

⑥表 4 は、放送におけるアナウンサーのことばの誤りを指摘したものである。ここで掲げたのは漢語・漢字語に関するもののみであるが、もとの指摘では、発音・読み方に関する

表4 河合絹吉『国語と四声』(1938.7)および
三宅武郎「放送国語批評」(1939.1)

	放送での誤り (河合絹吉)	正 (河合絹吉)	放送用語としての規定 (三宅武郎)
十銭	ジユツセン	ジツセン	ジッセン(ジュッセンも可)
逐電	チクデン	チクテン	
修抜	シユウフツ	シユウバツ	シュバツ
班女	ハンジョ	ハンニョ	ハンジョ
封	フウゼラル	ホウゼラル	
伝馬船	デンマセン	テンマセン	
戴冠式	サイクワンシキ	タイクワンシキ	
十五柱	十五ノシラ	十五ハシラ	
飛雪	トビユキ	ヒセツ	
子曰	子イワク	子ノタマハク	
藩主	バンシユ	ハンシユ	
懇望	コンボウ	コンモウ	
刀二十口	二十コウ	二十フリ	
刀二口	二クチ	二タフリ	
野邊地	ノベチ	ノヘヂ	
風波	カザナミ	カゼ、ナミ	
扈從	コジウ	コシヨウ	コジュウ
洗滌	センジャウ	センテキ	
出帆	シユツボン	シユツパン	
二十箱	ニジフパコ	ニジフハコ	ニジッパコ(ニジュッパコも可)
南方	ナンホウ	ナンポウ	
禮拜	レイハイ	ライハイ	仏教用語としてはライハイ、 普通語および基督教用語 としてはレイハイ
後方	コウボウ	コウホウ	
潰走	カイゾウ	カイソウ	
八走	ハチシ	ハツシ	
同士打	ドウシウチ	ドシウチ	ドシウチ、ドウシウチともに可
核心	ガイシン	カクシン	
不俱戴天	～サイテン	～タイテン	
逃亡	トウハウ	トウバウ	
諸將	シヨジョウ	シヨシヨウ	
守り育てよ	マモリ～	モリ～	
三棟	サンムネ	ミムネ	
先鋒	センボウ	センポウ	センボウ
街道	ガイドウ	カイドウ	
募集	モシユウ	ボシユウ	
瑠璃	リュウリ	ルリ	
副官	フツクワン	フツクワン	
洪水	ゴウスイ	コウズイ	
繁華	ハンガ	ハンクワ	
生存	セイブン	セイソン	
全治	ゼンヂ	ゼンチ	

るものが74例、アクセントに関するものが91例あげられている。

⑦表4は、⑥で指摘されたことばのうち、11例について放送用語委員会の見解を述べた箇所から抜粋したものである。執筆者の三宅武郎は、当時の用語委員会の事務局担当者の一人である。このうち「修抜」の放送における読みについては、1938(昭和13)年4月28日の用語委員会において、「再検の結果、現

行通り慣用に依る」ということであらためて[シュバツ]のままとすることが確認されている。

また⑧の「珠算」の読みに関連して、筆者が確認できた範囲内で明治期の新聞(讀賣新聞(明治23年2月4日附録1面))に「^{たまざん}珠算」という表記が見られたことを付記しておく。

⑩は、日本放送協会のアナウンサーが執筆したものである。

⑫は、放送用語としてどちらの発音にすべきかを決定しにくい漢語の例としてあげられたものである。執筆者の佐藤孝は、当時の用語委員会の事務局担当者の一人である。

今回ここで紹介した指摘について、細かい分析は今後時間をかけておこないたい。印象として言えることは、放送におけることばの「誤り」を指摘するものとして、漢語・漢字語の読み方に関することがたいへん多く取り上げられている、ということがありそうに思う。これは今後綿密に検証してゆかなければならないが、放送のことばの問題点という面から漢語・漢字語の読み方の誤りが指摘される例は、相対的に考えると現代ではこの当時ほどには多くないのではないだろうか。

これは、この当時の漢語・漢字語の読みにはさまざまなものがあつたのに対して、現代では統一的な規範性が強まっているものと推定する根拠になると思われる。

このような動きを「日本語の現状」と「放送での規範」という観点から見た場合、ここで定められた規範というのは「現代の追認」にすぎなかったのか、あるいは放送での規範整備が現実としての漢語の読みの統一化に寄与したと考えるべきなのか、今後とも考察してゆきたい。



『常用漢語発音整理表』の 成立まで

戦前に限っただけでも、用語委員会の成してきた成果は膨大なものになる。このすべてについて概観をする準備は残念ながらまだ筆者にはできておらず、ここではまず用語委員会のごく初期の議論・審議・決定について、わけても漢語・漢字語に関するものに焦点を当てて提示してみたい。初期について取り上げる理由は、この時期に議論されて示された用語の決定方針が、その後強い影響を与えているものと想像するからである。漢語・漢字語に着目する理由は、それまで日本人が経験したことのなかった「音声言語としての標準的日本語創成」という課題の解決にあたって、漢語・漢字語の読み方の問題が相当大きなものになっていたものと思われるからである。

1934（昭和9）年1月に第1回の放送用語委員会が開催され、1935（昭和10）年9月には『常用漢語発音整理表』が完成する。ここでは、その間の議論・審議を紹介する。なお、昭和10年の議事資料には残念ながら散逸しているものが多い。

○「漢語の調査に関する一般方針」

1934（昭和9）年1月に放送用語委員会が発足したあと、同年2月には「漢語の調査に関する一般方針」の草案が示された。この内容はその後数回にわたって追加・修正が施され、1935（昭和10）年3月に発刊された『放送用語の調査に関する一般方針』の一部として引き継がれている⁷⁾。

この草案は、以下のようになっている（原

文は縦書き）⁸⁾。

漢語の調査に関する一般方針 (草案初稿)

一、放送上の使用を予想される漢語を調査すること。

（附記）ここにいふ漢語とは、必ずしも語原によらず、専ら語感において普通に漢語と認めるものをさす。

二、右の漢語を、次の二部に分けて考へること。

第一部 おもに放送原稿を読むために要するもの（相当に難かしいものも予想しなければならない）

第二部 おもに部内で作る放送原稿に使ふもの（なるたけ平易なものに限りたい）

三、右の漢語に使用する漢字を調査して、その音を整理すること。

四、右の漢字の音の整理は、次の原則によること。

第一、一字ごとに「代表音」を定めること。

第二、右の代表音は、現代の日本において最も通俗に広く行はれてゐるものを採用して、いはゆる漢音、呉音その他の区別によらないこと。

第三、代表音のほかは、委員会の審議を経て、その使用範囲の広さにより「第二音」又は「第三音」とすること。

例 行 代表音(仮定) コー(かう) (漢音)

第二音(同上) ギョー (ぎやう)

第三音(同上) アン (あん)

京 代表音(同上) キョー (きやう) (呉音)

第二音(同上) ケー (又はケイ) (けい)

第三音(同上) キン (きん)

省 代表音 (委員会の審議を要す)

第二音 (委員会の審議を要す)

五. 熟字で二つ以上の読み方があるものは、委員会の審議を経て「第一の読み方」と「第二の読み方」とを定める。

例 日本 第一の読み方(仮定) ニツポン

日本 第二の読み方(同上) ニホン

日本語 第一の読み方(仮定) ニツポンゴ

第二の読み方(同上) ニホンゴ

皇子 第一の読み方

第二の読み方

(附記) 放送では第一の読み方によるのを原則とするけれども、その上での放送当務者の活用を束縛するものではないとすること。

六. 右の発音を示す仮名は、単に部内における放送上の心覚えのためゆゑ、なるべく純粹に発音の通りとすること。

例 本朝女二十四孝 (ホンチョー・オンナ・ニジューシコー)

比較 ((ほんてう・をんな・にじふしかう))

明治天皇 (メージテンノー)

比較 ((めいちてんわう))

(附記) なほ次第に発音上の自覚が進むにつれて、やや詳しい発音・アクセントその他の

符号の使用を認めるときは、別に定める約束によること。

七. 以上の調査の結果を総合して、放送用語基礎漢語表を作ること。

また、「補遺」として以下のような記述も残っている⁹⁾。

六. 一般に、すでに常用語化して大衆の「耳のコトバ」となつてゐるもの(例へばミョーニチ。コンバンなど一カナで書いてもすぐわかるもの)以外において、その字面を本とし、それを漢音・呉音・のどちらで読んでも大した差障りのないもの、或は現在は大体一定してゐても将来変化の可能性があると認められるものは、なるべく第一音で読むことを原則とし、或は第一音で読んでも誤りでないとする。

例 重複(仮にジューを代表音としてジューフクと読むことなど)

この「漢語の調査に関する一般方針」(草案初稿)では、「二.」において漢語を「ニュース用」と「部内作成原稿用」の二種に分けて考えることが提案されている(この考え方は、最終決定稿『放送用語の調査に関する一般方針』(1935(昭和10)年3月)において「耳で聞いてすぐ意味のわかる漢語」と「文字と離れてはわかりにくい漢語」というように文言を変えた上で継承されている)。この区別は、放送初期のニュース原稿が通信社など外部から入手されたもの(もともと「新聞

用」の書きことばで作成されたもの)であったことによるものである。外部から得られた原稿にある程度修正を加えて放送用原稿を作成していたのであるが、その修正にはおのずと限界があったであろうことが想像される。

また「四.」において、漢字一字一字の「代表音」を定めることが提議されている。「代表音」とは、日本語の漢字には一字に複数の読み(呉音・漢音・慣用音など)があるなかで、そのうちもっとも代表的な読み、というものである。この場合の「代表音」は、伝統的な「呉音・漢音・慣用音」という枠組みにとらわれず、あくまでも「読みとして(現在)もっとも広く用いられているもの」を採用することになっている。

「代表音」を定める理由は、漢語の読みをなるべく統一的に整備して記憶上の負担を軽減させようという意図に基づく。たとえば、「行」を第二音のギョーと読む漢語は「行、行者、行司、…」という数十語であり、第三音のアンと読む漢語は「行灯、行脚、…」という数語である、ということ覚えておけば、それ以外のものは代表音のコーで読めばよい、という発想である。一字一字について「代表音」を定めたうえで、読みの「ゆれ」がある漢語についてはなるべく「代表音」を採用する、という意図があったのである。たとえば、「重複」にはジューフクとチョーフクという二とおりの読みが「ゆれ」として当時も存在していたが、これは「重」の代表音をジューと定めた場合には、必然的にジューフクという読みが採用されるような形になっていた。

また、この草案においては「代表音」という術語が使用されているが、これが会議の席

上で「第一音」という名称に変更されたことが議事録に残されている。

なお、この「単漢字の読みをなるべく一定にしたい」という発想に対して、用語委員の一人である新村出はどうも否定的であったらしいことが、下記の記述から読み取れる。

「…私共の東京に於ける国語論者は成るべく一定したい、一元化したい、文ならブンといふ音を主な原則的な発音にして、モンと読むのは変則的な発音に敬遠してしまふ、それはどうだらうといふやうなことを相談されたに對しまして、それはいかぬ、さういふ風に一方を其の主なる音と立て、他方を貶する、落しめる、輕蔑するといふやうな態度を、根本の国語政策者或は国語教育の首脳者がするといふと、益々乱れて来るばかりだ、今年令を出して来年にはそれが一元化して行くといふやうなれば宜しいけれども、此の複雑な人文社会に於てはさう單純に行くものではなくて、却つて益々乱れて收拾すべからざるものになるから、是は国語の規格、規準といつた風のを定めて、其の中で錯綜したものは相当整理するといふ建前で行かなければならぬ、といふ風に申したのであります。(新村出(1943)『国語の規準』p.14)

まったくの想像であるが、草案での「代表音」が「第一音」という名称に変更されたのは、個々の漢字音に「代表」とそうでないものがあるわけではない、といったような新村出委員の持論が反映したものなのかもしれ

ない。

○「小雨」の読み

また同年3月には、「小雨」ということばについてラジオの放送で「コサメ」と読んだことについて取り上げている。伝統的な形はコサメであることを認めたとうえで、「されど現今は一般に「コアメ」の方が分り易きか」という記録が残されている。これは、伝統的な語形（コサメ）と新興的な語形（コアメ）との「ゆれ」があった場合に、新興的な語形を採用するという傾向・方針があったかもしれないことを推測させる。なお、同日の議事資料には放送で「コアメ」と読んだ例も紹介されている。

なお、「小雨^{アメ}を小雨^{サメ}と放送局に頼みます。」という投書¹⁰⁾が1941（昭和16）年にあることから、上記の決定以降も放送で実際に「コアメ」と読まれていたことがわかる。

また、「小雨^{アメ}がパラつく」というのを「地方訛」の1つとして取り上げている記述¹¹⁾もある。増田は東京出身で広島高校に赴任した人物なので¹²⁾、ここでは広島近辺の方言形として取り上げられたのだろうか。

平山輝男編（1992）『現代日本語方言大辞典』の「雨」の項で「コアメ」という語形が載せられているのは、兵庫と鹿児島である。また、倉嶋厚監修（2000）『雨のことば辞典』でも、兵庫での方言形として「こあめ」が載せられている。

○「工作」の読み

「工作」という漢語には、おもに「何かを作ること」という意味と、「何らかの働きかけをすること」という意味とがある。このう

ち、「工作」を前者の「作ること」という意味で用いた例は明治初期ごろにはすでに見られるが、後者の「働きかけ」という意味での用例は、昭和初期ごろの比較的新しいもので、当時の中国語からの借用である。

この「工作」ということばは1934（昭和9）年ごろに大流行したようである。平岡伴一（1935.2）（1935.10）は、東京朝日新聞に「工作」が朝夕刊1日分（1934年9月19日）だけで16回も表れていることを指摘し、この新語がどのような経緯でいつごろ借用されたのかを丹念に追っている。

なお現代の辞書には、「工作」の語誌として以下のように記述されている。

- (1) 中国の英華辞書や洋学書を通じて幕末明治初期に日本に伝わった語。
- (2) 昭和初期、旧満州や上海での日中衝突により、中国語の「工作」が、日本の新聞の軍事関係の記事に頻繁に現れたが、その際日本では軍事的な色彩を帯びたものと受取られる一方、「裏工作」「秘密工作」「スパイ工作」などにおけるように、裏の、陰で行なわれるものという語感が加わった。（『日本国語大辞典 第2版』（小学館））

また、平岡伴一（1935.10）には、

現代語の研究にはラジオ放送もその資料となるのであるが、資料としてのラジオ放送は前に遡ることが出来ない特質を持つて居る。従つてラジオ放送に於ける“工作”の出始めは取調べに困難であるが、“工作”は新聞語である

から、ラヂオに於ても、しばしば文章朗読的であると批評されるニュースの放送に最も多く現れる。

という記述があり、「工作」が放送にも頻出していたことがうかがわれる。

この「工作」という漢語は、当時、コーサクと読まれたりコーサと読まれたりしており、「ゆれ」のあることばであった。たとえば、昭和初期の新語辞典には以下のような記述が見られる。

工作（コーサク）支那語より転用さる、企画しかつ仕事をする意。

（喜多壮一郎監修・麴町幸二編

（1930）『モダン用語辞典』実業之日本社 近代用語の辞典集成（13）として復刻）

工作（こうさく）支那語より転用、企画し且つ仕事をする意

（大西林五郎編（1933）『新聞新語辞典』日刊新聞通信社 近代用語の辞典集成（36）として復刻）

こうさ 工作 こうさくと同じ

（下中彌三郎（1936）『大增補改訂や、此は便利だ』（『日本国語大辞典 第2版』から再引用）平凡社）

このように複数の読みがなされていた状況において、放送用語委員会では最終的には現代と同じくコーサクという読みを1934（昭和9）年4月11日に採用する¹³⁾。

この決定にあたって作成された資料が、表5である。これは、一語の読みの審議にあたって、個人個人の語感だけに頼ることなく、

さまざまな資料を参考にしておこなってゆくという姿勢があらわれているものであり、これは現在にも継承されていると考えられる。

この資料を見ると、「工作」の読みは辞書類をはじめとしてコーサクが主流であり、それに加えて『『作』の第一音はサクであろうからコーサクが穏当である』という推論が読み取れる。なお、「新語（特に漢語）の発音は、なるべく第一音によること」という方針（「語彙・句法の選定に関する一般方針」）が、1934（昭和9）年6月6日に示されている。

「工作」がやや例外的にコーサとも読まれたのは、この資料の八にある「サクは『ツクル』の意、サは『ハタラク』などを表すと考えられている」ということも要因としてあげられるだろう。ここで議題としている「新語としての『工作』（政治的工作など）」には、「何かをツクル」という意識は希薄であり、「動作、所作」などと意味上の共通点があるからである。

○「大審院」の読み

「大審院」は現在の最高裁判所の前身であるが、これについても読みのゆれがあった。この読みを決定するのにあたって作成された資料が表6であるが、たいへん広範囲かつ詳細な調査が成されていることに驚く。参考にした辞書類は国語辞典のみならず百科事典・和英辞典も用いられている。

資料では、明治初期に設置された「大審院」に関して、当時は漢音の勢力がたいへん強くなっていった時期で、「タイシンイン」と発音されていたであろうが、それがなぜ今日になって「ダイシンイン」と呉音に戻るような傾向を見せているのか、ということに関して、

表5 新語「工作」のヨミカタ（コーサクかコーサ）についての審議資料（1934.4）

一. その用例の二三
政治的工作 外交工作 軍事工作 春の美容の準備工作 内閣の補強工作 齋藤内閣の居残り工作(三月三十一日アサヒ朝刊三
面論説) 音楽的工作(三月三十日よみうり十面伊庭孝氏) 若妻の強盗工作

二. 読売には全部「こうさく」とフリカナあり。東朝には、「工」の字にはフリカナありて「作」の字にはフリカナなし。但、最近「こうさく」とありし由。

三. 三月二十日夜九時三十分の放送ニュースでは「準備コーサ」と発音
四月一日夜七時の放送ニュースでも「外交コーサ」と発音

四. 「作」の字を一字でよむときには誰でも「サク」といふ。それにおのつから第一音かあらわれてゐるかなほ次項参照。

五. 帰納的に第一音を求める。
(一)「サク」 (イ)作文 作歌 作詞 作曲 作品 作者 作家 作成 作製 作例 作意 作図 作字 作為 作戦 作
略 作物 作得 作病 作事
(ロ)著作 創作 製作 制作 合作 近作 舊作 述作 力作 名作 大作 傑作 佳作 駄作 耕作 農作
豊作 不作 家作 造作

(二)「サ」 (イ)作用 作法 作業 作佛 作略(二) 作禮而去
(ロ)動作 座作 発作 所作 操作 造作(二) 諸悪莫作

六. 漢呂音共に「サク」にて「サ」は別音なれども佛家にては「サ」を用ふ。
「諸悪莫作、作禮而去、作佛、活作略」等。
儒教的には「作善降之百祥」にも「サクゼン」とよむ。(大字典字源とも)

七. 古き造語の「作用、所作、動作、座作」などは、すべて佛家のよみにて教へられたるものか。文教の権の所在によりて。

八. 或は、「サク」は「ツクル」の意味で、「サ」は「ハタラク」「オコル、オコス」等の意味に考へられてゐるところもあるか。
「振作」を「シンサ」とよむ老荘階級が多いのは、或は右の心持のあらはれか。ところがこの「振作」を、諸種の和漢辞典に悉く「シンサク」としてゐる。
大字典 振作。シンサク。ふるひおこすこと。
字源 振作。シンサク。ふるひおこる。作は興起
大日本国語辞典 しんさく 振作。振ひ作(オコ)すこと。新興。振起。作興。
言泉 しんさく。振作。ふるひおこすこと。盛んにすること。又、ふるひおこること。盛んになること。振興。振起。
張説又「六楽振作、萬舞再弱」
広辞林 なども皆「しんさく」にて一も「しんさ」とせるものなし。
国民精神作興の詔書中の「振作」は「シンサク」に一定の由。
内閣官房 総務課 照会回答

九. 「作興」も諸種の和漢辞典に「サクコウ」とあり。

十. 「工作」は、老荘階級も、多くは「コーサク」と読む。但し中に少しは「コーサ」と読む人もあり。

十一. 「経済的合作」といふ語は「ガツサク」に限るか如し。

十二. なるべく新語の字音は第一音を適用して、第二音・第三音による読み方の例外を作らないやうにしたい。
但し、これは原則的な精神であつてあなちこれによつて「工作」の「作」の読み方を牽制するものではない。

表6 「大審院」の読み方について（審議資料）（1934.4）

一. 「大」の字は「太」「泰」に通すといふ。
(参考) 康熙字典 「太」の字の項 【塩田注 ここでは引用省略】

二. 「大」の字原は人の象形なること論なし。されど「太」の字原については異説あり。或は大大>太>太>太となりしものなりといふ。
「泰」の字原は双手と水とをもつてせる会意にして、いはゆる「潛也」の本義の存するところ、これに諧聲記號の「大」を加へて作り。

三. 日本において最も普通に用ひらるる「大」「太」「泰」の意味は左の如し
大 おほきい おほいに 太に通じて絶対の義
太 ふとい 大の大なるもの 絶対の義 はなはだ
泰 やすし
(参考)「泰山」の「泰」は「大」にて「大山」の義。又、人名「太郎」の「太」は「長也」の義

四. 「大」「太」「泰」の字典音を左に示す。
漢音 / 呉音

大 / タイ タ / ダイ ダ
 太 / タイ タ / ダイ ダ
 泰 / タイ / タイ

五. 今,字において「大」「太」を,意味において「おほいに」「おほきい=比較的な大」および「絶対的な大」を,音において「タイ」「ダイ」「ダ」をえらひて,その用例の数個を表示す。

(附記) 「大」は今語「おほきい」なれど,古語「おほいーおほし」にて,「多しー多い」に同じ。「少」は今語「すくない」古語「すない」にて,「小」に義同じ。漢字の方にて「小」「少」と相通す。

「康熙字典」【塩田注 ここでは引用省略】

故に,官名に「大・中・少」と用ひたるは,右の「小」の義をとりたるものにして,その「大」も比較的大なりとす。

意味	発音	「タイ」に限る	「ダイ」に限る	「タイ」「ダイ」共用
大いに(副詞)		大笑す 大切に 大正		
大きな(比較的な大)		大将(中将・少将) 大山 大陸 大会 大衆 大人	大納言(中納言・少納言) 大山(伯耆山名) 大佛 大乘 大(仏) 大衆(仏) 大日本 大人	大佐・大尉(海軍にて) 大地 大海 大道
絶対の義		大極無極 大禮 大逆 大命 大詔 大典 大政 大婚 大葬	大元帥(太元帥とも) 大極殿 大嘗會 大宰相 大相国 大統領 大勲位	

六. 「大正」の出典は「大亨,以正天道也」(易)

「君子大居正」(公羊傳)。故に「大」は「大いに」なり。然れども「大審」は「大いに審く」には非ずして,その「大」は絶対の義なるべし。

七. 「太」は漢字においては殆どすべて「タイ」と読む。然れども称号・官名(桓武天皇の漢音奨励以前に設けられたるもの)等には「ダイ」又は「タイ」と読む

太政官 太政大臣 太宰府 太上天皇

八. 右「太上天皇・太政大臣・太政官」などの「太」は,すべて絶対の義なり。「太宰府」の「太」も絶対の義なること,大貳・少貳の「大」に比較しても考ふべし。

九. 俗解するものあり。「大」は比較の大にて,「太」は絶対の義なれば,「太」は必ず「タイ」と読むと。而して「大審」の「大」は「太」の義に借るものなれば,これ必ず「タイ」と澄みて読むべしと。右「第四,第七」両項の例を見て,その誤りを悟るべし。

十. 要は,「大」「太」における清音濁音の区別はいはゆる漢音・呉音の区別にして,畢竟,時代と地方との発音の区別のみ。これによつて断じて意義を異にするものにあらず。

十一. 但,字形の使い別けにおいて,古く,「大」は「大小の大」に,「太」は絶対の義に用ひたることあるは,上掲の「太宰府」と「大貳,少貳」との例によりてほぼ考ふことを得べし。

十二. 呉音(濁音)と漢音(清音)との語感には次の如き傾きあるが如し,

	呉音	漢音
一.	古	新
二.	佛家に残る	儒家に用ふ (されど王仁などは呉音なりしなるべし)
三.	語感において内語的なり (このこと夙に平安朝の文献に見ゆ)	語感において外語的なり
四.	通俗的	学者的
五.	重く力強き感あり	清軽

十三. 今,問題の「大審院」において,その「大」は絶対の義なりと解すべし。然れども,その発音においては「タイ」「ダイ」の二つが有り得べし。

(一)タイシンイン 明治初期以来今日に至るまで,部内においては「タイシンイン」といふ。けだし,明治初期には儒学系統の漢語の全盛時代なりしが故に,これを漢音の「タイ」にとりしは当然とすべし。

備考,明治初期に大審院判事たりし谷津春三は常にタイシンインと呼び居りし由,その女(當五十九才)の談による。又現在も部内においては廷丁の末に至るまでタイシンインといふ由,三宅大審院判事の談による。

(二)ダイシンイン 然れども漸次国民語化するにおよび,その読み方も通俗化して「ダイシンイン」と読むに至れるものか,明治二十二年初版の「言海」以来,殆ど觸目する限りの国語辞書にも悉く「ダイ」と濁音に読めり。左に代表的なる辞書名を挙ぐ。

「言海」「大日本国語辞典」「言泉」「廣辞林」

「大字典」「字源」(以上二冊漢字典)

(参考)「日本百科大辞典」(三省堂)「家庭大百科字彙」(富山房) 例外(百科大事典(平凡社)は「タイシンイン」とす。大森氏署名の稿)「竹原スタンダード和英」「武信和英」但,武信和英にはTの部にも名をあげてDの部を見よとあり。

十四. 現代の中年以下の人は多く「ダイ」なり。黄バスの車掌もよく「大審院前停留所」を「ダイシンインマエ」といふ。三宅大審院判事の講演(四月六日)の時の紹介アナウンス(松澤女史)にも「ダイシンインハンジ」といへり。但、中には「タイシンイン」といふものなきにあらざ、ただその数の比較的に少きのみ。

十五. 漢語における呉音の勢力は明治維新をもつて一たび幕をうち、明治以後の新造語は殆どすべてともいつてよきほどに漢音の盛行を見、勢の及ぶところ例へは「大衆」といふがごとき佛敎語を復活再用せるものをも「タイシユウ」といふ今日の時代に、なにゆゑに「大審院」の「大」を「ダイ」といふ一般の傾向の存するにや。それにつきて考査して得たる結果の概要、およそ左のごとし。

(1) 漢字二字より成る熟語は、左の如く「タイ」が優勢なり。但、蒐集の例語二一六語中

タイに一定してゐると認めらるるもの 一四六

ダイに一定してゐると認めらるるもの 四八

おなじ意味にて「タイ」「ダイ」の二つに読まるるもの 一九

(例) 大輪 大地 大海 大罪 (下略)

「タイ」「ダイ」及び下字の読み方の違ひにて意味の変るもの 三

(例) 大人 大名 大兵

然るに漢字三字より成るものには、断然「ダイ」が優勢となる。中には左のごとく、同一の意味の語にして、二字にては「タイ」、三字にては「ダイ」となるものもあり。

(例) 大戦一大戦争 大男一大男気 大勝一大勝利 大計一大計画 大利一大利益

右は思ふに、上の一文字と中下の二字とを区切りて発音せんとする発音上の自然的傾向に出づるもの(アクセントの転換も第二字目の始めにあり)にして、本題の「大審院」もまた、この発音上の自然的傾向の支配を免るること能はず。

(2) 語義の上よりいへば「外国語一学校」にして、その発音は「ガイコクゴ一ガツコー」なるべきに、実際の発音にては「外国一語学校」と区切りて「ガイコクーゴカツコー」といへり。

又、「大勲位も実は「大勲・位」即ち大勲(タイクン)の位の義なるべく解せらるれど、これも「大勲位」と三字に熟しては普通に「ダイクンイ」の如く発音す。

かくのごとく、熟語は、その組成の原義の如何に拘らず、一旦熟語となりては「熟語」としての発音上の一般的傾向に支配せらる。而して、熟語三字中の上の一文字が「大」なるときは、それは「大の字」の「大」即ち「ダイ」の発音となるか一般的傾向なり。

十六. これによつてこれをみるに、現代の普通語としては、少くとも、或は「ダイシンイン」と読むこと多しの程度に認めざるを得ざるべきか。

それにつきなによりも有力なる参考とせざるべきは、當代の権威と目せらるる多くの国語辞書が悉く「ダイ」に一致せることなり。

十七. 然らば放送用語としては如何。普通語と専門的用語との二面に亘るものは、むしろ普通語によるべきこと、既に囲碁の「手合・大手合」の読み方において決定例あり。然れども「大審院」は一種の固有名詞なり。これを人名に準じて考ふべく、直ちに右の「手合・大手合」の例に倣うことあたはず、これ用語調査の一般方針中に、特に次の一項目を設くる所以なり。

一. 人名に準じて考へられる官庁や団体の名称で、部内の呼び方と一般の呼び方が違つてゐる場合には、その官庁や団体と協力し、委員会の審議を経て、それぞれ別個の事情に応じ、適当な処置を講ずること。

(備考) 放送上、固有名詞を呼ぶにつきては、それによりて、一面、その固有名詞の所有者が直ちに自分自身を認識し得る必要あると同時に、他面、一般聴取者が、その固有名詞の所有者を認識し得る必要あり。故に、すべて固有名詞の所有者(特に公共的なるものにおいて)は、ひとり主観的満足のみによりて自己の読み方を固執すべからず。これ厳然たる一個の社会的道義的責任なりと信ず。

然れども、大審院のごときは一種の別格的存在にして、普通の官庁乃至団体とは、その自己主張の権威においておのづから異なるものありて存す。これ本文にいはゆる「それぞれ別個の事情に応じ」て慎重に審議せざるべからざる所以なり。

(参考)

一. この稿の筆者は「大衆」を「ダイシユウ」といふことあり。これ新語として流行せざりし以前に佛敎語彙より学びて、それか先入主となりて今に抜け切らざるかためなり。家人これを評して「東北の人かとおもふ」といふ。

二. 然るに他面、次のごとく感ずるひともあり。曰く「大審院」を「タイシンイン」といふと朝鮮の人かとおもふと。(二十代の青年)

三. 人の感じのさまざまなること、おほむねかくのごとし、されど次の感想は、大審院の職掌と相関聯して一顧すべき価値あるか。曰く「タイシンイン」といふと法律に凝り固まつてゐるやうた」と(二十代の青年)

四. 然るに一高女五年生(二クラス五十九名中五十七名)の感想は、この項の筆者(中年以上)をして殆ど奇想天外より落つるの感をいたかしめたり。曰く「ダイシンインといふ方が重々しくて権威がある。タイシンインでは軽いやうで権威がない」と。ああ、言語感覚の時代と共に推移ること、かくのごときかな。因に筆者の如きは「タイシンイン」といふ方が重く聞ゆるなり。

(参考五) 「日比谷バス」の事務所に就きて、その車掌の呼び方を質したるに、養成のはじめは明かに「タイシンイン」と清みて教ふるも、うかと「ダイシンイン」と(濁りて)いふものもありとのことなりしゆゑ、その自然に「ダイ」と(濁りて)いふことのある人の大略の数を知りたしと、車掌監督に依頼し置きたるところ、左の如き回答を得たり。

総人員は七十餘名なれど、質問に明答したるは六十名なり。内、十名が「ダイ」と濁りていふ。残り五十名は「タイ」と正しく清みて発音す。云々。

三字漢語「大〇〇」においてはダイというような発音になる傾向がある、という推定を導き出している。これは現代にも当てはまる傾向である¹⁴⁾。

この資料をもとに、放送用語委員会では「タイシンイン」という読みを1934（昭和9）年4月11日に採用する¹⁵⁾。理由として、「大審院部内の伝統的読み方を尊重して」ということが掲げられている。

なお、国語辞典類は伝統的な発音を採用する傾向があるのに対して、新語辞典の類はその当時の発音をそのまま反映している可能性が高いと思われる。大正から昭和にかけての新語辞典には、以下のとおりダイシンインと濁音での表記が見られる。

ダイシンイン
[大審院] わが国の最高級の普通司法裁判所。(以下略)

(小林花眠編著(1922)『新しき用語の泉』帝国実業学会 近代用語の辞典集成(6)として復刻)

ダイシンイン(大審院) たいしんあん 大審院は最上 さいじやう 級の裁判所にして、(以下略)

(竹野長次監修(1928)『近代新用語辞典』修教社書院 近代用語の辞典集成(9)として復刻)¹⁶⁾

○『常用漢語発音整理表』

1935（昭和10）年9月に、冊子『常用漢語発音整理表』が出される。冒頭に「本稿は放送用語並発音改善調査委員会の審議を経たるものなり 昭和十年九月 社団法人日本放送協会」と示されており、公的な資料として位置づけられる。

編纂過程については、用語委員会議事録のうち1935（昭和10）年のものの大半が散逸してしまっているため、残念ながら詳細がわからない。しかしここまで述べてきた1934（昭和9）年の議論から推測されるとおり、「工作」や「大審院」と同様に、一語一語に関して相当詳細な議論が成されたものと思われる¹⁷⁾。

この冊子では、読み方に問題のある漢語145語に関して、放送での「読み」が示されている。このうち、漢字の（「字典音」ではなく）「慣用音」に従ったものは29語である（浅井真慧（1990））。また、冊子の後半部分には、「附録」として「現代に広く行はるゝ漢字の慣用音」およびその字典音の一覧が載せられている。ここで用いられた漢和辞典として、『大字典』（啓成社）と『字源』（明治書院）があげられている。

IV 『常用漢語発音整理表』の読み

ここでは、『常用漢語発音整理表』（以降『常用漢語』と略称）に掲載された漢語145語に関して、『字源』¹⁸⁾に載せられている読みと、現代の読み（1998（平成10）年発行の『NHK日本語発音アクセント辞典』（以降『アクセント辞典』と略称）に載せられているもの）とを、筆者があらためて調べて表に示した（表7）。

なお、表には『常用漢語』において決定された発音をそのまま記してあるが、カナ表記方式は『字源』『アクセント辞典』でそれぞれ異なる。ここでは、実質的に同じ発音となる項目（かなづかいの違いや合拗音の表記も含む）には「◎」を付し、一致しない項目にはそれぞれ

表7 『常用漢語発音整理表』(1935)に掲載された145語に関する『字源』(1923)および現代『NHK発音アクセント辞典』(1998)との対照

凡例:

語句	『字源』の読み	←→	『常用漢語発音整理表』の読み	備考	←→	現代『アクセント辞典』の読み
暗示		◎	アンジ	「ジ」濁音	◎	
↑	『常用漢語発音整理表』に掲載されている項目	↑	↑	『常用漢語発音整理表』での備考欄	↑	現代『アクセント辞典』に掲載されている読み
	『字源』に掲載されている読み					『常用漢語発音整理表』と実質的に同じになる場合には表記省略(空欄)
	『常用漢語発音整理表』と実質的に同じになる場合には表記省略(空欄)					やや異なる漢語が掲載されている場合には「 」として掲載
	やや異なる漢語が掲載されている場合には「 」として掲載					掲載がない場合にはφ
	掲載がない場合にはφ					掲載がない場合にはφ

イ. 『字源』語形A, 『常用漢語』語形A, 『アク辞』語形Aという形で、3冊とも共通しているもの(A/A/A)40項目

語句	『字源』の読み	←→	『常用漢語発音整理表』の読み	備考	←→	現代『アクセント辞典』の読み
暗示		◎	アンジ	「ジ」濁音	◎	
一言を呈する	「一言」イチケン	◎	イチケン		◎	「一言(～を呈する)」イチケン
胸に一物	「一っのたくらみ、秘謀」の意)	◎	イチモツ	成句として従来の読み方に従ふ	◎	
一緒		◎	イッショ	「ショ」	◎	「《一緒》」イッショ
越権		◎	エッケン	古くは「ラッケン」	◎	
圓滑		◎	エンカツ		◎	「円滑」エンカツ
議定書		◎	ギテエショ	「テエ」内閣に照會済・外務省に照會済	◎	
嗅覺		◎	キュウカク		◎	「きゆう覚《嗅》」キューカク
減殺		◎	ゲンサイ	「サイ」常用語中「サイ」と讀むは上の二語のみとす【塩田注「相殺」と「減殺」】	◎	
絢爛		◎	ケンラン		◎	「《絢爛》」ケンラン
膏肓		◎	コオコオ	「病膏肓に入る」など	◎	「病こうこう《膏肓》」ヤマイコーコー
誤謬		◎	ゴビユウ		◎	「誤びゅう《謬》」ゴビュー
示威運動		◎	ジイウンドオ	「ジ」濁音	◎	「示威」ジイ
證據湮滅	「湮滅」インメツ	◎	ショオコインメツ		◎	「隱滅」インメツ
上梓		◎	ジョオン		◎	「じょうし《上梓》」ジョーシ
饒舌		◎	ジョオゼツ		◎	「じょう舌《饒》」ジョーゼツ
從容		◎	ショオヨオ	「從容として死に就く」など	◎	
贖罪		◎	ショクザイ		◎	「しよく罪《贖》」ショクザイ
眞摯		◎	シンシ		◎	「《眞摯》」シンシ
神事		◎	シンジ	「シ」清音 古くは「ジンジ」	◎	
進捗	「進陟」シンチョク	◎	シンチョク		◎	「進ちよく《捗》」シンチョク
數奇		◎	スウキ	『數奇な運命』など	◎	
刹那		◎	セツナ	「セツ」慣用音に従ふ	◎	「《刹那》」セツナ
著服	「著服」チャクフク(「着」は著の俗字)	◎	チャクフク	「フク」	◎	「著服」チャクフク
稠密		◎	チュウミツ		◎	「ちゅうみつ《稠密》」チューミツ
傳播		◎	デンパ		◎	「伝ば《播》」デンパ
天粟		◎	テンピン	「セン」「ピン」	◎	「天びん《粟》」テンピン
憧憬		◎	ドオケエ	「ドオ」を採る	◎	「《憧憬》」ドオーケイ
讀會	ドククワイ	◎	ドクカイ	「ド」濁音「読會省略」など	◎	「読会」ドクカイ
人氣		◎	ニンキ	「ニン」『人氣がある』『土地の人氣』など	◎	「人氣」ニンキ
稗史小説	「稗史」ハイシ	◎	ハイシシヨセツ		◎	「はい史《稗》」ハイシ
拔群	「拔羣」ハツクン	◎	ハツクン	古くは「ハクン」	◎	「拔群」ハツクン
訃音		◎	フイン	成語・成句として従来の読み方に従ふ	◎	「ふ音《訃》」フイン
便宜		◎	ベンキ		◎	
發起		◎	ホッキ	「ホツ」呉音(これらの外は多く漢音「ハツ」に讀む)	◎	「發起」ホッキ
發句		◎	ホック	「ホツ」呉音(これらの外は多く漢音「ハツ」に讀む)	◎	「發句」ホック
發心		◎	ホッシン	「ホツ」呉音(これらの外は多く漢音「ハツ」に讀む)	◎	「發心」ホッシン
發端		◎	ホツタン	「ホツ」呉音(これらの外は多く漢音「ハツ」に讀む)	◎	「發端」ホツタン

由緒		◎ ユイショ	「ショ」	◎	
懶惰		◎ ランダ		◎	「らん惰(懶)」ランダ

ロ. 『字源』で複数の読みがあり、『常用漢語』および現代では単独の読みになっているもの (A B / A / A) 8 項目

語句	『字源』の読み	↔	『常用漢語発音整理表』の読み	備考	↔	現代『アクセント辞典』の読み
言語道断	ゲンゴダウダン・ゴンゴダウダン	○	ゴンゴドオダン	「ゴン」成句成語として従来の読み方に従ふ	◎	
刺客	セキガク・シカク	○	シカク		◎	
笑殺	セウサツ・セウサイ	○	ショオサツ	「サツ」慣用音に従ふ(原義は「甚だ」)	◎	
神宮	シンキユウ・ジングウ	○	ジンクウ	「ジ」濁音(国定教科書の振仮名に従ふ)	◎	
相殺	サウサツ・サウサイ	○	ソオサイ	「サイ」常用語中「サイ」と読むは上の二語のみとす【塩田注「相殺」と「滅殺」】	◎	
惱殺	ノウサツ・ノウサイ	○	ノオサツ	「サツ」慣用音に従ふ(原義は「甚だ」)	◎	「惱殺」ノオサツ
忙殺	ハウサツ・ハウサイ	○	ボオサツ	「サツ」慣用音に従ふ(原義は「甚だ」)	◎	
発作	ハツサ・ホツサ	○	ホツサ	「ホツ」異音(これらの外は多く漢音「ハツ」に讀む)	◎	「発作」ホツサ

ハ. 3 冊とも同じ発音が掲載されているが現代では複数の読みが認められているもの (A / A / A B) 8 項目

語句	『字源』の読み	↔	『常用漢語発音整理表』の読み	備考	↔	現代『アクセント辞典』の読み
越年		◎	エツネン	古くは「ヲツネン」	○	エツネン, オツネン
議定官	「議定」ギテイ	◎	ギジョオカン	「ジョオ」賞典局に照會済・行政裁判所に照會済	○	「議定」ギジョー; 「議定」ギテイ(それぞれ別項目)
水郷		◎	スイキョオ	「水郷めぐり」など	○	スイキョー, (スイゴ ー)
同人	(「同じ志の人」の意)	◎	ドオジン	『同人雑誌』など	○	ドージン, (ドーニン)
白衣の勇士	(語釈として「しろきころも, びやくえ」あり)	◎	ハクイ		○	ハクイ; ハクエ; ビヤクイ; ビヤクエ(すべて別項目)
白衣の天使	(語釈として「しろきころも, びやくえ」あり)	◎	ハクイ		○	ハクイ; ハクエ; ビヤクイ; ビヤクエ(すべて別項目)
分泌		◎	ブンピツ		○	ブンピ, (ブンピツ)
末席		◎	マッセキ	「マツ」	○	マッセキ, パッセキ

ニ. 『字源』と現代では複数の読みがあるもの (A B / A / A B) 4 項目

語句	『字源』の読み	↔	『常用漢語発音整理表』の読み	備考	↔	現代『アクセント辞典』の読み
攪拌	カウハン・カクハン	○	カクハン	「カク」慣用音に従ふ	○	《「攪拌」》カクハン, コーハン
攪乱	「攪亂」カウラン・カクラン	○	カクラン	「カク」慣用音に従ふ	○	「かく乱《攪》」カクラン, コーラン
茶菓	サクワ・チャクワ	○	チャカ		○	サカ; チャカ(それぞれ別項目)
茶話會	「茶話」サワ・チャワ	○	チャワカイ		○	サワカイ, (チャワカイ)

ホ. 『字源』のみ異なる読みのもの (A / B / B) 28 項目

語句	『字源』の読み	↔	『常用漢語発音整理表』の読み	備考	↔	現代『アクセント辞典』の読み
一言もない	「一言」イチゲン	×	イチゴン	「ゴン」成句成語として従来の読み方に従ふ	◎	「一言(〜もない)」イチゴン
一言半句	イチゲンハンク	×	イチゴンハンク	「ゴン」成句成語として従来の読み方に従ふ	◎	
濫奥	ウンアウ ¹⁹⁾	×	ウンノオ	成語として従来の読み方に従ふ	◎	「うんのう《瀦奥》」ウンノ
過言	クワゲン	×	カゴン	「ゴン」成句成語として従来の読み方に従ふ	◎	
忌諱	キキ	×	キイ	「イ」慣用音に従ふ	◎	《「忌諱」》キイ
公示	コウシ	×	コオジ	「ジ」濁音	◎	
三種の神器	「神器」シンキ	×	サンシュノジンキ ^o	「ジ」濁音(国定教科書の振仮名に従ふ)	◎	
撒水車	サツスキ	×	サンスイシャ	「サン」慣用音に従ふ	◎	
撒布	サツプ	×	サンブ	「サン」慣用音に従ふ	◎	「散布」サンブ
指示	シシ	×	シジ	「ジ」濁音	◎	
情緒	ジヤウシヨ	×	ジョオチョ	「チョ」慣用音に従ふ	◎	
省略	セイヤク	×	ショオリヤク	常用語中「歸省」「反省」「内省」「三省」「人事不省」及び「省察」の外は「ショオ」とす	◎	
神社	シンジヤ	×	ジンジャ	「ジ」濁音(国定教科書の振仮名に従ふ)	◎	
神道	シンダウ	×	シントオ	「シ」清音 『神道十三派』など	◎	

他言	タゲン	×	タゴン	「ゴン」成句成語として従来の読み方に従ふ	◎	
端緒	タンシヨ	×	タンチョ	「チョ」慣用音に従ふ	◎	
堪能	カンノウ	×	タンノウ	「…に堪能な人」など(日常語として)	◎	「たんのう」堪能
緒(に就く)	「緒」シヨ	×	チョ	「チョ」慣用音に従ふ	◎	「緒」チョ
緒言	シヨゲン	×	チョゲン	「チョ」慣用音に従ふ	◎	
緒論	シヨロン	×	チョロン	「チョ」慣用音に従ふ	◎	
提示	テイシ	×	テイジ	「ジ」濁音	◎	
掉尾	テウビ	×	トオビ	「トオ」慣用音に従ふ	◎	「とう尾(掉)」トービ
獨壇場	「獨擅」ドクセン	×	ドクダンジョオ	「獨壇場」より生じたる新しき語と認む	◎	「独壇場」ドクダンジョー
駁論	ハクロン	×	バクロン		◎	「ばく論(駁)」バクロン
末子	マツシ	×	ハツシ	「ハツ」	◎	
反駁	ハンパク	×	ハンパク		◎	「反ばく(駁)」ハンパク
白衣観音	「白衣」ハクイ(語釈として「しろきこころも、びやくえ」あり)	×	ビヤクエカンノン	成語として従来の読み方に従ふ	◎	「白え観音」ビヤクエカンノン
紊乱	「紊亂」ブンラン	×	ピンラン	「ピン」慣用音に従ふ	◎	「びん乱(紊)」ピンラン

へ. 『アクセント辞典』で『字源』と『常用漢語』の両方の読みを採用しているもの(A/B/AB) 8項目

語句	『字源』の読み	↔	『常用漢語発音整理表』の読み	備考	↔	現代『アクセント辞典』の読み
安心立命	アンジンリツメイ	×	アンジンリツメエ	古くは「アンジンリュウメエ」	○	アンジンリツメイ,(アンジンリュウメイ)
音信不通	「音信」オンシン	×	インシンフツウ	成語・成句として従来の読み方に従ふ	○	オンシンフツウ,(インシンフツウ)
奥義	オウギ	×	オウキキ	古くは「オオキキ」	○	オウキキ,オウキキ
早急	サウキフ	×	サクキウ	「早急」「早速」の二語に限り「サツ」と讀む	○	サクキウ,(ソーキウ)
重複	チヨウフク	×	ジュウフク	「ジュウ」を第一音として、漢文風の成句の外は主として「ジュウ」を用ふることとす(「重寶な」は別の意味)	○	チョーフク,(ジューフク)
同人	ドウジン(「同じ志の人」の意)	×	ドオニン	「ニン」「同じ人」の意味	○	ドージン,(ドーニン)
末孫	マツソン	×	ハツソン	「ハツ」	○	ハツソン,マツソン
放縦	ハウシヨウ	×	ホオジュウ	「ジュウ」慣用音に従ふ	○	ホージュウ,ホーショー

ト. 『字源』と『常用漢語』は同じだが現代では違う読みになっているもの(A/A/B) 2項目

語句	『字源』の読み	↔	『常用漢語発音整理表』の読み	備考	↔	現代『アクセント辞典』の読み
一物も得ず	(ひとつのもの。一事,又、一件の義)	◎	イチブツ		×	イチモツ
泌尿器科	「泌尿器」ヒツノウキ	◎	ヒツニョオキカ		×	「泌尿器」ヒニョーキ

チ. 『常用漢語』のみ異なる読みのもの(A/B/A) 8項目

語句	『字源』の読み	↔	『常用漢語発音整理表』の読み	備考	↔	現代『アクセント辞典』の読み
喫茶	キツサ	×	キツチャ		×	キツサ
軽重	ケイチヨウ	×	ケエジュウ	「ジュウ」を第一音として、漢文風の成句の外は主として「ジュウ」を用ふることとす(「重寶な」は別の意味)	×	ケイチャー
杜撰	ヅサン	×	ズザン		×	「《杜撰》」ズサン
絶叫	ゼツケウ	×	ゼツキウ	「キウ」慣用音に従ふ	×	ゼツキョー
讀書會	「讀書」ドクシヨ	×	トクシヨカイ	「トク」清音	×	「讀書會」ドクシヨカイ
人面獸心	ジンメンジュウシン	×	ニンメンジュウシン	「ニン」成句として従来の読み方に従ふ	×	ジンメンジュウシン
評定官	「評定」ヒヤウテイ	×	ヒョオジョオカン	「ジョオ」賞勲局に照會済・行政裁判所に照會済	×	「評定」ヒョーテイ
满腔	「满腔子は惻隱之心」「满腔子都是春意」マンカウ	×	マンクウ	「クウ」慣用音に従ふ	×	「満こう(腔)」マンコー

リ. 『字源』あるいは現代『アクセント辞典』に語形掲載のないもの・その他 39項目

語句	『字源』の読み	↔	『常用漢語発音整理表』の読み	備考	↔	現代『アクセント辞典』の読み
截断機	「截断」セツタン	×	サイダンキ	「サイ」慣用語に従ふ		φ
綴字法	「綴字」テイジ	×	セツジホオ	「セツ」慣用音に従ふ		φ
洗滌	センデキ	×	センジョオ	「ジョオ」慣用音に従ふ(法律用語の「洗滌」は「テキジョ」)		φ (「洗浄」センジョー)
參差		◎	シンシ			φ
品隲		◎	ヒンシツ			φ
蠕動		◎	ゼンドオ			φ
使喉		◎	シソオ			φ
戒防		◎	カイチョク			φ

席未		◎	セキマツ	「マツ」	φ
貴臨		◎	ヒリン		φ
謬見		◎	ビウケン		φ
忌服		◎	キブク	「ブク」	φ
未亡人		◎	ミボオジン		φ
稟性		◎	ヒンセエ	「ヒン」「ピン」	φ
椽大	「椽大之筆」テンダイノフデ	◎	テンダイ	「椽大の筆を揮ふ」など	φ
慰藉	「慰藉」キシヤ	◎	イシャ		φ
練達堪能	φ	◎	レンタツカンノオ	「練達堪能の士」など	φ
稟申	φ	◎	リンシン	「リン」慣用音に従ふ	φ
装幀	φ	◎	ソオテエ	「テエ」慣用音に従ふ	φ
截然	φ	◎	サイゼン	「サイ」慣用語に従ふ	×
貼付	φ	◎	チョオフ		×
讀者	φ	◎	トクシャ	「トク」清音	×
核心	φ	◎	カクシン		◎
默殺	φ	◎	モクサツ	「サツ」慣用音に従ふ(原義は「甚だ」)	◎
遂行	φ	◎	スイコオ		◎
讀本	φ	◎	トクホン	「トク」清音	◎
服喪	φ	◎	フクモ	「フク」	◎
古刹	φ	◎	コサツ	「サツ」	◎
弛緩	φ	◎	シカン		◎
名利	φ	◎	メイサツ	「サツ」	◎
簡明直截	φ	○	カンメイチョクサイ	「サイ」慣用語に従ふ	○
口腔	φ	○	コオクウ	「クウ」慣用音に従ふ	○
残滓	φ	◎	ザンシ		◎
定例閣議	φ	◎	テエレエカクギ°	「テエ」内閣に照會済・外務省に照會済	◎
獐猛	φ	◎	ドオモオ		◎
發頭人	φ	◎	ホットオニン	「ホツ」呉音(これらの外は多く漢音「ハツ」に讀む)	◎
豊饒	φ	◎	ホオジョオ		◎
稟議	φ	◎	リンギ°	「リン」慣用音に従ふ	◎
元服	(ブカブカ判読不能)	○	ゲンブク	「ブク」	○

の辞典での発音表記を示すようにした。辞典で複数の読みを示しているもののうち一方が一致している場合には「○」を付し、もう一方の読みもあわせて記した。「φ」は「漢語として立項されていない」という意味である。『常用漢語』で取り上げられた漢語とそれぞれの辞典とで取り上げられている漢語とが厳密には一致しない場合(ここでは字体の違いも含む)には、辞典で立項されている漢語もあわせて示した。また、漢字表記はここではできるだけ元資料のとおり「本字」を用いるようにした。

ここで取り上げられているのは145語で、計量的な分析にたえうるほどの数ではない。そのことを承知したうえで表を見てみると、類型としてもっとも多いものは、『字源』『常

用漢語』『アク辞』の3冊で語形が共通している(A/A/A)類²⁰⁾[イ.]で、次に『常用漢語』と『アク辞』とが共通している(A/B/B)類[ホ.]であるように判断できる。つまり、『常用漢語』と『アク辞』とは読みが共通しているものが多く、1935(昭和10)年当時の決定が現在にまで相当引き継がれていることが推定される。

それぞれの類型について見てみよう。まず[イ.]は、大正末から現代にかけて比較的安定した読みを保っている語群であると言える。ただし、これらが当時懸案事項として取り上げられたのは、多かれ少なかれ「読みのゆれ」が存在したからなのであろう。この[イ.]のうち、「刹那」については、1938(昭和13)年4月28日の用語委員会において、

「再検の結果、現行通り慣用に依る」ということであらためて〔セツナ〕のみを認めることが確認されている。

〔ロ.〕〔ハ.〕〔ニ.〕は、〔イ.〕の亜種とも位置づけることができる。『字源』および『阿克辞』に『常用漢語』と同じ読みが載せられているが、それ以外の読みも載せられているものである。その「それ以外の読み」が、〔ロ.〕は『字源』に、〔ハ.〕は『阿克辞』に、〔ニ.〕は両方に認められる。

〔ロ.〕は、大正期ごろには「ゆれ」ていた（と思われる）読みに対して『常用漢語』において統一的な決定を下し、それが現代まで有効であると考えられるものである。この場合、用語委員会の決定（ひいては全国向けラジオ放送）によって「読みのゆれ」が収束したと考えるのか、あるいは単に「実際の口語では当時収束しつつあった優勢な読み」に追隨して用語委員会決定を下し、その収束の動きが現代にまで引き継がれていると考えるのかはなかなか判断がつかないが、今後の課題としたい。

〔ハ.〕はこれとは反対に、「読みのゆれ」が拡大しているともとらえられるものである。あるいは、現代『阿克辞』編纂までの期間に、より伝統的な読みもあわせて採用したという項目もあるかもしれない。

〔ニ.〕は、大正期ごろに「読みのゆれ」があり、それを用語委員会決定として統一をしようとしたものの、現実にはその「ゆれ」が存続し続けたものとして位置づけられるだろう。この〔ニ.〕のうち、「攪乱」については、1938（昭和13）年4月28日の用語委員会において、「再検の結果、現行通り慣用に依る」ということであらためて〔カクラン〕のみを

認めることが確認されている。また「茶話（会）」の〔サワ〕～〔チャワ〕については、同じく4月28日の時点で「宿題」として再検討の対象になっている。

〔ホ.〕は、それまでの伝統的な「読み」から脱して用語委員会として新しい「読み」を採用したものと考えられる。そして、その決定の効力が現代にまで続いているととらえられる。この〔ホ.〕のうち、「忌諱」「撒布」「情緒」「端緒」「緒」「緒言」「緒論」「掉尾」「紊乱」については、1938（昭和13）年4月28日の用語委員会において、「再検の結果、現行通り慣用に依る」ということであらためて〔キイ〕〔サンプ〕〔ジョーチョ〕〔タンチョ〕〔チョ〕〔チョゲン〕〔チョロン〕〔トービ〕〔ビンラン〕のままとすることが確認されている。

〔ヘ.〕は、『字源』と『常用漢語』とで異なる読みが掲載されているが、現代『阿克辞』ではそれら両方の読みが採用されているものである。

〔ト.〕は、『字源』の読みが『常用漢語』に引き継がれているとも考えられるもので、それが現代には継承されていないものである。数はきわめて少ない。

〔チ.〕は、用語委員会決定として伝統的ではない読みの採用を試みたが、現代には引き継がれなかったものとしてとらえられる。この〔チ.〕のうち、「杜撰」「絶叫」「満腔」については、1938（昭和13）年4月28日の用語委員会において、それぞれ〔ズサン（現行はズザン）〕〔ゼッキョー（現行はゼッキュー）〕〔マンコー（現行はマンクウ）〕という改定案が提出され、可決されている。また「喫茶（店）」の〔キッサ〕～〔キッチャ〕について

は、同じく4月28日の時点で「宿題」として再検討の対象になっている。

また次の[リ.]のうち「綴字法」については、同じく1938(昭和13)年4月28日の用語委員会において[テツジホー(現行はセツジホー)]というように改定されている。それに対して「簡明直截」「截然」「洗滌」「装幀」「稟議」「稟申」は、「再検の結果、現行通り慣用に依る」ということでその時点では[カンメイチョクサイ][サイゼン][センジョー][ソーテイ][リンギ][リンシン]のままとなっている。

表8は、これまで述べてきたものを集計して図にしたものである。一見してわかるとおり、「同形」は、図中上段の『字源』と『常用漢語』よりも、下段の『常用漢語』と現代『阿克辞』のほうが多い。『字源』は1923(大正12)年刊行、『常用漢語』は1935(昭和10)年の発行で、12年の間隔がある。いっぽう現代『阿克辞』は、『常用漢語』から63年たったあとの1998(平成10)年刊行である。つまり、間隔としては『字源』と『常用漢語』のほうが短い(12年間:63年間)のに、共通する語形は『常用漢語』と現代『阿克辞』のほうが多い(75語形:113語形)のである(表9)。

『字源』は漢和辞書であり、いっぽう『常用漢語』と現代『阿克辞』は「発音用の資料」という違いがあり、比較にあたっては慎重を期す必要がある²¹⁾。その点を勘案しても、この結果から、『常用漢語発音整理表』の編集方針が、かならずしも伝統的な語形のみこだわらない、当時としては画期的な内容であったことが推測される。

表8 『字源』(1923)『常用漢語』(1935)『阿克辞』(1998)の漢語共通語形(1)

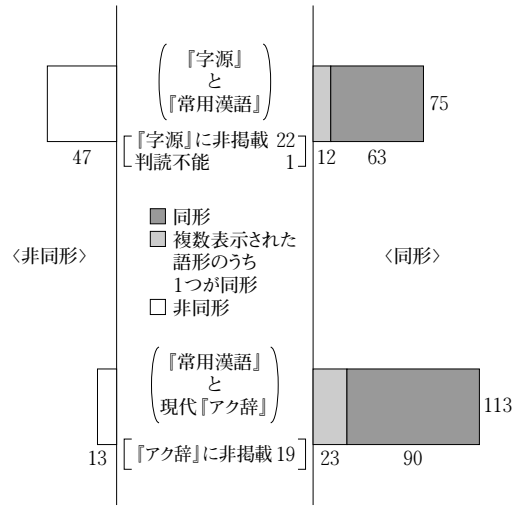
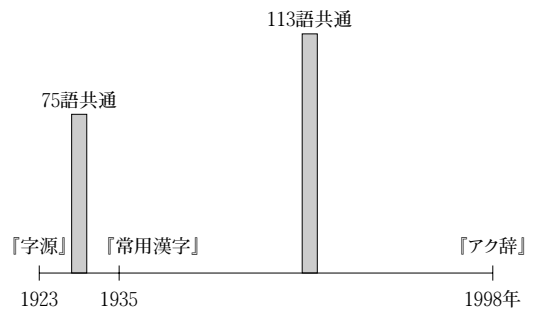


表9 『字源』(1923)『常用漢語』(1935)『阿克辞』(1998)の漢語共通語形(2)



V 暫定的な本稿のまとめ

本稿において、1935(昭和10)年の『常用漢語発音整理表』編纂までの流れを、きわめて断片的にはあるが概観してみた。

この時期の放送用語に関する研究としてはまだ入り口の段階に立ったばかりであり、今後分析を進めてゆく予定である。今回の試論

からは、

- 漢語一語一語の「読み」の決定に関して、
- 相当広範かつ詳細な資料を準備し、慎重に審議していたこと
 - どちらかという漢語の伝統的な「読み」よりも、全体としての規則性（記憶上の負担の軽減）を大きく視野に入れた新しい「読み」を採用しようとしていたこと
 - その決定は、当時の規範的な漢和辞典の記述とは異なるものも少なからずあり、現在にまで同様に継承されているものが多い

などといったことが指摘できる。これは、書きことばの伝統にこだわらず、新しく「耳のコトバ」を創成しようという放送用語委員会の姿勢の表れであると考えすることはできないだろうか。

今回の稿を出発点として、当時の決定に作用したさまざまな要因（社会的言語状況、それぞれの委員の考え方、利用できた辞書類の分析など）を多角的にとらえ、放送用語研究の歩を進めてゆきたい。

（しおだ たけひろ）

注：

- 1) 本稿では、漢字表記・音読みのを「漢語」、漢字表記語彙全般を「漢字語」と呼ぶことにする。
- 2) 社団法人日本放送協会（1935）『常用漢語発音整理表 [附録] 漢字慣用音一覧』（謄写版）。筆者はNHK放送文化研究所放送用語班所蔵のものを用了。このほかに国立国会図書館にも所蔵がある。

3) 放送用語の歴史に関する研究は、これまでもNHK放送文化研究所を中心としておこなわれてきており、なかでも浅井真慧氏の一連の研究は必読文献である。本稿の筆者は、放送用語というものが「日本語史」全体の枠組みの中でどのように位置づけられるのか、ということの主目的をとらえ、個々の語・語彙の分析に比重を置くことによって、放送用語史の実態をより明確に描き出すことを目指している。

4) ここでの引用にあたっては、原則として、かなづかいに関しては原表記のままとし、漢字の字体に関しては論述内容に支障のない場合には現代の字体に直した。これ以降も同様である。

5) 詳細は未詳だが、以下の記述からおそらくカナモジカイ関連の雑誌であろうと推定される。

「余は過去二ケ年に亙り、アナウンサーの誤読を忠実にノートに書きとめ之を二回ある雑誌上を借りて発表した。その内容については既に米良氏によつて本誌（八月一日号）に紹介せられたからこゝに重複を避ける。然し前の発表は専らカナモジカイの主義主張に關聯する問題にのみ引きつけなされたので、考察が尚充分でなかつた節がある。」（増田幸一（1932.9）「国語とラヂオ放送（二）」『調査時報』第二卷第十八号）

6) 表の中で、「統治」の読みに関しては備考欄にあるとおり用語委員会事務局としてトーチを採っている。それにもかかわらず、投稿者のトーチが正という指摘に対して「○（同感・肯定）」という記述がなされているのは、おそらく誤りであろう。

7) 一連の追加・修正による記述内容の変遷については、別の機会にあらためて取り上げることにしたい。

8) このほかに「代表音を決定するための審議資料」というものが添付されており、「行・京・省」を含む漢語が読みによって分類されて提示されている。

るが、今回は引用を省略する。

9) この「補遺」については、審議資料として会議実施前に作成されたものなのか、あるいは審議後に作成されたものなのか、不明である。「補遺」内では、草案における「代表音」という術語と、審議を経て言いかえとして提示された「第一音」という術語とが共存しているからである。なお、この「補遺」において振られている数字は「六。」であるが、これは「八。」の誤りであろうか。

10) 「俳人・寒川鼠骨」の投書、『国語文化講座月報 2』昭和十六年八月号（『国語文化講座』第四卷附録）に掲載。

なお、1963（昭和38）年1月22日の放送用語小委員会議題には、「[コアメ] [コサメ] の両様があるので、どちらかに統一したい」としたうえで、「[小雨] と表記し、[コサメ] と読む」という「案」が提示されている（これがこの後どのように正式決定されたのかは現在調査中）。

11) 増田幸一（1932.9）「国語とラジオ放送（二）」『調査時報』第二卷第十八号

12) 増田幸一（1932.4）「方言意識に関する一研究」『心理学研究』第七卷第二輯

13) なお、放送の聴取者から当時寄せられた投書にも、「工作—工作 統一希望。」（「放送の言葉に関する事項投書調査」1935.5、前掲表2）、「[工作] を「コーサ」といふが「コーサク」の方がよい」（「投書内容調査 「放送の言葉」に関する事項」1936.11、前掲表3）というものが寄せられているが、これらの投書が雑誌に載せられたときにはすでにコーサクという統一決定が成されていた。

14) 同様の傾向は佐山佳予子（1986）でも示されている。これは「大～」という形の漢語に関して『NHK日本語発音アクセント辞典』に掲載された例を分析したものであるが、三字漢語において「大審院」だけが例外的にタイシンインとなっていることを記している。これがなぜ例外的なのか

は、本稿でおこなったように歴史的な背景を考える必要があると言えるだろう。

なお、明治時代における「大審院」の読みについては、筆者が確認できた範囲内では、讀賣新聞（明治23年2月7日2面）に「大審院」という表記が見られた。

15) 審議資料として残されている記録（表6）には、「昭和九年四月廿五日」というスタンプが押されている。この資料は、タイシンインと読むことにするという「決定」を補強するために事後に作られたものなのであろうか。

この「大審院」の読みについては、ここで紹介した決定以降、同年6月25日、続いて1938（昭和13）年3月24日にも取り上げられたという記録が残っているが、いずれも議題が散逸している。1938年11月11日の「放送用語備要（一）」という資料に、「大審院 タイシンイン 大審院に就き調査の結果に依る」という記述があり、最終的にタイシンインとして明示されている。

なお、1962（昭和37）年4月17日の放送用語小委員会議題において、「大審院」の読みを[ダイシンイン]とする「案」が提出されている。理由として挙げられているのは、辞典類の調査結果、一般の慣用、最高裁判所広報室の回答である。ところが、『NHK文研月報』1962.6の記述によると、同4月26日の放送用語委員会では、これをくつがえして[タイシンイン]として決定されている。理由として、歴史的な名称であり設置当時の読み方を尊重すべきである（最高裁判所広報室の回答は正式な取り決めではない）、ということが記されている。

16) 語釈中の「大審院」は清音であるように見えるが、印刷不鮮明である。いっぽう見出しの「ダイシンイン」は明瞭である。

17) 1935（昭和10）年の漢語・漢字語の読みに関する放送用語委員会議案としては、NHK放送文化研究所放送用語班所蔵の資料によると、「漢語発音整理案」というものが、(1) および (2) として1月26日審議・決定、同様に (3) [3月11日]、

(4) [3月26日], (5) [4月26日], (6) [5月11日], (7) [5月28日]と継続的に取り上げられたという記録が残っている。しかし議案そのものはすべて散逸しており、詳細な検討ができないことがたいへん悔やまれる。この複数回の議論を経て、『常用漢語発音整理表』が1935(昭和10)年に発刊されたのである。

ただし、議案そのものは残っていないものの、以下のような「再録」が部分的に残っている。貴重な記述なので、ここにそのまま引用する。

(以下 1938(昭和13)年4月28日 放送用語並発音改善調査委員会議案から)

「常用漢語発音整理表」中、告知課提出の改訂案十項につき、現行案決定当時の委員会の意見を左に摘録して、審議上の参考資料とす。

一、「読者」の「トクシャ」「ドクシャ」いづれにても可。

若い人達にはむしろ「トクシャ」の方が多くであらうといふ風に考へて「トクシャ」にしたもの。

二、「一言を呈する」「一言します」等の「一言」「言」はなるべく漢音「ゲン」に統一したいが「言語道断」「過言であらう」「一言半句」「一言もない」「他言を憚る」等は「ゴン」の伝承に従ふのが現代では穏当であらう。その外は同じ「一言」でも「一言を呈する」「一言御挨拶申上げる」「一言しますが」「一言居士」等は「ゲン」であらうといふ意味で表の如くしたわけである。

三、練達堪能の士

口語としては「タンノーな」を認めるが、「練達堪能の士」といつたやうな漢文口調のときには、やはり字典音の通りに読むのが穏当であらう。現に大隈内閣当時に使われたときも「レンタツカンノー」といつた。今でも何か政治上で使ふやうなことが起つたら如何であらうかと考へて見る必要がある。

四、人面獸心

漢文の中では「ジンメン」と読んでも、日本文学の中では「ニンメンジュージン」が普通である。このことを若い人達に伝へて

おく方が深切であらうといふので、特に「ニンメンジュージン」の例を掲げたのである。

五. 元服

「元服」といふことは現代にない風俗であるから、これを現代の発音感覚だけに任せれば「ゲンブク」と発音するのが当然である。けれども「元服」は歴史上文学上に多く出て来るから、豫め伝承の発音を伝へておく方がよいであらうといふことで特に掲げた。

六. 杜撰

伝承の発言は「ズザン」であるが、近來の新聞ルビは「ずざん」であり、若い人達も多く「ずざん」である。然し、以前委員会の席上で賛否をとつたときには次の如くであった。

ズザン(新村 岡倉 葎村)

ズサン(長谷川 神保 宝田)

又、辞書では大言海、大日本国語、言泉、広辞林、辞苑、大字典、小柳漢和、詳解漢和、武信和英「ずざん」、字源のみ「ずざん」。

七. 貼付

「占」を諧聲記号とせる漢字の例

占	音	セン	占	苫
	音	テン	点	店 點 霽
	音	デン	鮎	
	音	タン	站	
	音	チン	帖	
	音	チョー	帖	貼

「貼付」の「テンプ」と読まれること相当に広いやうであるが、上記の如く「占」を音符とせるものに他にも「帖」があるから、これ一つを俗読みにする必要はあるまいといふので「チョーフ」となつた。

八. 贖罪

漢音	ショク
	續 贖

〔呉音 ゴク

漢音 トク

讀 瀆 (尺) 牘 牘 (鼻禪)

〕呉音 ドク

大言海, 大日本国語辞典等には「しょくざい」「ぞくざい」を双拳す。而して「とくざい」は誤りとす。漢和辞典では凡て「シヨクザイ」とす。東京基督教青年会他に問合せ回答, 今日一般に「シヨクザイ」といふ由。

九. 「分泌」「泌尿」は医家の方で決定せず, 「ブンピ」と「ヒニョーカ」, 「ブンピツ」と「ヒツニョーカ」, 「ブンピツ」と「ヒニョーカ」等区々なりしたため, 仮に「ブンピツ」「ヒツニョーカ」とせしもの。

十. 数奇

これを「サクキ」と読むべしといふこと, 素読に教はり来れること久し。これには何か故あるらしく, 或は「数奇」の「数」を「屢々」の義にとりて, 運命の屢々奇なること、解したるに基づくものにあらずやとも一考せらる。蓋し「屢々」の義ならば音「サク」なり。

例「数々^{サク}見擯出」

然るに「数奇」の数^{サク}は運命の義なれば, これを「スウキ」と読む方が却つて正しきなり。即ち数奇「命運不佳」なり。故に現行の字典・辞典すべて「すうき」と読む。「さくき」と読むもの一もあらず。明治初年に至るまでの漢文素読に「サクキ」とせること, その源流がどの辺まで溯るか未詳。

18) 『字源』北辰館・明治書院・目黒書店, 1923 (大正12)年発行。今回の調査にあたっては, 縮刷版(1925(大正14)年)を用いた。

19) この漢和辞書(『字源』)において, 連声の表記をどのように取り扱っているのかは明示されておらず, 「ウンアウ」という表記が[ウンオー]という音を示したもののなのか, あるいは[ウンノー]

という連声化した音を示したもののなのかは, 検討の余地がある。しかし, 「因縁」の項には「インエン」と「インネン」の両方が載せられていることから, 連声化した場合にはナ行のカナを用いて表記したものであろうと推定し, ここでは[ウンオー]という音を示したものと判定した。

20) (A/A/A)類というのは, たとえば「暗示」に関して, 『字源』ではアンジ(=A)という語形があり, また『常用漢語』および現代『アク辞』でもアンジ(=A)がある, ということを模式的に示したものである。また, (A/B/A B)類というのは, たとえば「早急」に関して, 『字源』でサウキフ(=A), 『常用漢語』でサッキウ(=B), 現代『アク辞』ではサッキューとソーキューの両方(細かく言うとサッキューが第一, ソーキューが第二)が掲載されている, ということの意味する。

21) また, そもそも比較の対象として『字源』は適切な資料なのか, といったことも考えてゆかなければならない。放送用語の策定にあたって用いられた辞典類は多岐にわたっているが, 今回は『常用漢語』の付記に記されていた『字源』を試みに用いたのである。今後は, 他の辞典類との関連も広く探つてゆきたい。

引用文献

- (辞書類および記述内容の採集対象として用いた資料は本文中に示し, ここには研究的文献のみを掲げた)
- 浅井真慧(1990)「耳のコトバの建設を導いた人びと <エピソード編>」『放送研究と調査』第40巻5号
- 佐山佳予子(1986)「おおー だいー たいー (大)」『日本語学』第五巻第三号(1986年3月号)
- 塩田雄大(1999)「東京発のテレビ番組の中の方言」『日本語学』第18巻第13号(1999年11月臨時増刊号)
- 平岡伴一(1935.2)「“工作”といふ流行語」『外来語研究』第3巻第1輯
- 平岡伴一(1935.10)「“工作”に関する追つて書き」『外来語研究』第3巻第2輯